
切られ蜻蛉の事

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切られ蜻蛉の事

【Nコード】

N7838Y

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

戦国時代後期。三河国で起こった一向一揆。一揆勢としてこの戦に参加した蜻蛉の前立を用いる勇将・桜井調所は、この日も敵方の松平家康勢を圧倒していた。そんな調所の前に、駄馬にまたがり貧相な鎧をまとう若武者が飛び出してきた。その若武者の手には、二丈（六メートル）を超える大槍の姿があった。

雲霞の如く黒い帯がはるか遠くに広がり、こちらを飲み込まんと窺っている。しかし、垂れ込める朝靄あさむやが向こうの姿を細切れに隠す。しかし、その朝靄も匂いや音までは隠せない。篝火の匂いは風を伝って渡ってくるし、鎧の札さねの擦れ音、馬のいななきが遠くに居てもなお響いてくる。何より、敵軍の放つ気。こちらを食い散らかさんと唸る熊の放つ威圧にも似た感触が、冷たい空気に乗ってこちらの身をちりちりと焼く。

分かんものだ。

馬上の武者・桜井調所さくらいすしは、愛用の百舌槍もくしつ（百舌の舌に似せた小さな穂先を持つ槍）を組んだ両腕に抱きながら、相對する陣を睨む。かつて身を置いていたはずのあの陣と、今や相對しているとは。

敵陣の大将は、三河のほぼ全域を治める領主・松平蔵人佐家康である。松平家康、調所のかつての主である。かつての主が、野原を挟んだ陣のさらにずっと奥、本拠の安祥城に控えている。

なぜ、こうなった。

この数力月の間で天地がひっくり返った。それに納得が出来ていない。なぜ、主と決めた松平蔵人佐家康を向こうに回す羽目になったのか。そしてなぜ、自分が主、松平家康の首を取らねばならなくなったのか。

調所の馬がいなく。今にも戦場に飛び出さんとばかりに気を張り詰め、前足で何度も地面を蹴り上げている。じれている。目の前の戦に気が逸っている。調所としてそれは同じことだった。しかし、機ではない。駆け出さんと鼻息を荒くする馬を留め、ふと振り向く。自陣の旗が揺らめく。そこには松平の名はない。

南無阿弥陀仏。

冷え切った朝の風に、己の掲げる身のよりどころが揺らめく。そうだ、この言葉だ。調所は苦々しげにその言葉を見上げる。

数ヶ月前のことだ。三河に点在する一向宗の寺から檄文が飛んだ。どうやら、三河の一向宗の本拠・本證寺から発されたものらしい。その檄文には、三河の主・松平家康への離反勧告と阿弥陀仏へのさらなる帰依が書き連ねられ、信徒たちへ一向一揆への参加を求めるものであった。

調所は次男坊である。政治向きのこととは桜井家の家督を継いだ兄に任せてある。これまで兄に従う形で松平家康に従っていた。此度の件、兄がどちらにつくか。兄の出した結論のまま、自分の身の置き場を決めようと考えていた。そして、兄の出した結論は、「一揆衆への参加」だった。

仕方ないことだ、と調所は思っている。

松平家康の足元は脆かった。ずっと織田や今川といった大大名人質として過ごした若君が、今川の弱体化を機に三河に舞い戻った。領主といえば聞こえはいいが、実際には地侍たちのご機嫌をうかがいながら、領主の座の上でびくびくしているだけの存在だ。地侍衆の中には、あまりあの若君を快く思わない者もいると聞く。

びくびくしているのは、何も松平家康だけではない。地侍衆とて同じことだ。調所たちの本拠である三河国西部は元々阿弥陀信仰、殊に一向宗の宗勢が強い地域である。地侍・桜井家としては、自分に従う手の者や領民たちの意向に反することができない。意向に反すれば、何とか保っている地侍の立場を失うことになるだろう。すっかり阿弥陀びいきになっていく領民たちや郎党たちを見るにつけ、松平側につくなど不可能だと思ひ知らされる格好になる。

一向一揆への加勢が決まった夜、人の目から隠れるようにして兄は言った。

『お前だけでも殿の側につくがいい』

しかし、調所は首を横に振った。一向一揆側につくと決めてもななかつた。それに、戦事がまるで得意でなく、この戦国の世に生きるには優しすぎる、最近頭に白いものが混じり始めた兄の許を離れ

ることはどうしても出来なかった。

そうして調所は、一向一揆の旗の元にいる。

冷たい風が、兜をかぶらぬ調所の垂らした髪の毛を揺らす。当世流行りの五枚胴具足は冷たい風すら通さない。ふと後ろを見れば、眼を血走らせて鍬や鈍ら刀を構える一向宗門徒たちと、共に戦を駆け抜けた侍衆たちの姿があった。

一向宗門徒たちは死を恐れない。「厭離穢土^{おんりえと}」。一向宗にはそんな法理がある。この世は汚れた世である。そう説く。そして続いて「欣求浄土^{こんくじょうと}」。浄土をただ希求する。そう続ける。そして、一向宗の坊主たちはこれを利用して、「極楽に行けるのだから、死は貴いものである。特に、阿弥陀様の御為の戦においての死はさらなり」と門徒たちに吹き込んだ。そうして、民たちは何者も恐れぬ死兵と化した。

調所からすれば異質な者たちであった。調所が今まで武者として切り結んできたのは、努力や才に支えられた武勇によって死への恐怖を遠ざけたものたちだった。だが、一向門徒は違う。死そのものを恐れない。それゆえに手に負えず、無気味だった。たとえ味方だとしても。

朝日が辺りに降り注ぎ始める。それにつれ、敵兵を隠していた霧が晴れてきた。この一向一揆によって松平の家中は二つに割れたはずだが、世に三河武士と褒めそやされた松平家康の陣はその数を半減させながらもなお堅牢であった。

やるか。

調所は供の者に命じた。

「兜をここへ」

少し遅れ、供の者が調所に兜を掲げた。

やはり、俺が信ずるはこれしかない。

兜の前立。戦国武者たちは、己の荒ぶる魂を表現するために兜の前立てを用いた。ある武者は軍配をあしらい、自分の知将振りを表した。またある者は不動明王像を前立てに当て、鬼を粉碎する憤怒

の明王と自分を重ね合わせた。

調所の前立は蜻蛉とんぼであった。鋼鉄製の蜻蛉が下を向いて、兜の前立て部分に留っている意匠である。

戦国の時代にあつて、蜻蛉は武者たちに称揚される存在であつた。蜻蛉は絶対に後ろに飛ばない。その性質が、武者たちの心象風景に重ね合わされたのだらう。

だが、それ以上に、前立に蜻蛉を選んだのは調所の心のありようの結果だつた。

蜻蛉はいい。無心に前に向かって飛ぶ。

常々、そう調所は思っている。調所が蜻蛉に惹かれているのは、前に向かって飛ぶ、という性質よりも、むしろ無心であるということとこころだつた。どんなに取り繕ったところで戦は殺し合いである。戦場には時折美談が生まれるが、それは無数の残酷な死の上に咲いたあだ花のようなものだ。戦場の残酷やあだ花に心を乱されることなく、調所は戦場という空を飛びたかつた。

俺は戦場に舞う蜻蛉でしかない。否、そういうものでありたい。

それ故に、蜻蛉。

兜を被り、緒を締めた瞬間、味方衆から歓声が上がつた。

「おお！ 蜻蛉武者！」

「出た、泣く子も黙る戦神！」

囃のような歓声が戦場に響く。

桜井調所の名は知られていなくとも、蜻蛉の前立をあしらつた「蜻蛉武者」は三河一帯では知られた存在だつた。どの戦でも必ず一等かそれに近い功を上げる。如何な危機とて槍一本で切り払う。決して引かぬ侍。その豪壮ぶりは、味方にとってはこれ以上ない加護であり、翻つて敵からしたら脅威であつた。槍を執つてから早十余年。三河一帯においてはその武功が轟く豪の者である。

戦場は舞台に似ている。必ず千両役者がいる。

調所はまさにその千両役者なのである。

百舌槍をぐるぐると頭上で回す調所。槍が唸るたびに阿弥陀衆の

感嘆の声が上がる。そして、軍に熱気が巻き起こり調所に降り注ぐ。しかし、調所の心中は静かなものだった。

俺には関係ない熱気だ。

調所は一向宗というものにさほど興味がない。兄も含め、周りが一向宗になびいていく中、どうしても調所はその輪に入るをよしとしなかった。未だに一向門徒たちの放つ熱気 宗教的な熱狂を理解できない調所がいる。

そんなものがなくても、俺は前に進める。

なぜなら俺は 。

調所が槍を脇に構えたその瞬間、敵陣から迅雷のような鬨の音が届いた。遠すぎて、大將が行なう「えいえい」の掛け声が聞こえない。皆で上げる「おお」の怒号だけが此方に届く。そうしてしばらくすると、霞みのように広がる敵陣が前進を始めた。

「厭離穢土」

「欣求極楽」

門徒たちも声を上げ始める。一人一人の小さな声はやがて糾合してゆき、最後には大合唱となる。それはさながら、読経にも似た響き方だった。

調所は馬の腹を蹴った。

発条が外れたかのように馬はその身を跳躍させる。

後ろからどよめきが走る。そのどよめきには、ある種の憧れのようなものが混じっている。

しかし、調所からすればそれは雑音でしかない。

蜻蛉武者・桜井調所は、さながら蜻蛉のように、無心に戦場の空を舞う。

「名に聞こえし蜻蛉武者とはわしの事よ！ 死にたくなければ蔵人佐殿への道を開けい！」

調所の檄が、戦場に響き渡った。松平の侍衆の気炎も、一向門徒たちの念仏をもかき消した。

この日の調所は神がかった、と言っても過言ではない。

まず調所が当たったのは松平の先鋒軍百であった。弱卒は馬で踏み殺し、手向かいせんと飛びかかってくる者は狙い澄ました百舌槍で鎧を打ち抜く。すぐに調所の周りは死の香りに満ちる。

やがて敵兵の誰かが調所の前立に気づく。すると、ひたひたと闇が広がるかのように、たった一人の武威によって百あまりの陣に恐怖が塗りたくられる。

下郎たちの悲鳴が馬の下で広がる。

「蜻蛉武者！」

「に、逃げる！」

敵陣が割れ、敵部将への一本道が出来る。馬を急きたてその小さな道を単騎で抜ける。

敵部将は恐怖ですくんでいる。その部将に槍を繰り出し、一瞬で屠る。馬から落ちた敵部将は打ち捨てたまま次の敵陣へと駆ける。

そんなことを何度か繰り返すうち、気づけば敵雑兵数十、部将三、四人を打ち捨てている。それを刹那の間にやってのけた。

味方の一向門徒たちはついてきていない。徒兵が多いゆえに、調所の単騎駆けに追いついては来ない。彼らは調所が打ち崩した陣を飲み込んでいくのだろう。はるか後ろから駆けてくる味方を背中に、馬上の調所は目の前いっぱい広がる敵陣を睨む。

退かぬ。

調所は槍の石突近くを持って、槍を頭上で何度も振り回した。

かかってこい。

その謂いだ。

しかし、誰も前に出てこない。

ちっ。

調所は槍を頭上で旋回させたまま馬の腹を叩いた。調所の意志のまま、馬が前に駆け出す。

俺は退かん。無心に飛ぶ。戦場の蜻蛉だ。

敵の矢の射程に入ったらしい。射かけられた矢が調所の少し横を

掠める。中には兜や肩の札に当たる。だが、致命傷どころか負傷には至らない。駿馬で駆けている限り、真正面からぶつからない限り矢の威力は目減りする。

調所の単騎突撃に、敵陣はむしろ逃げ腰だった。またもや陣を後退させる。

まだ来ないか！

調所は馬を止めた。

一町ほど先で亀のように固まりきっている敵陣に向かって、調所は槍で手招きをした。頭上で槍を振り回すのに続き、かかってこいという意思表示だ。

しかし、敵陣は動かない。それどころか、敵はどやどやと鳴動し、その陣を後退させている。

こんなものか、これが松平家康の軍か。

調所はそれでも待った。陣でもいい。勇猛の士でもいい。

しかし、こない。
ならば。

調所が馬の腹を叩こうとした、その瞬間だった。

タガが外れたかのように、松平勢の陣から一騎飛び出した。黒い馬を駆っている。しかし、足が遅い。ずんぐりとした体格の足の太い馬だ。恐らくは農耕馬かそれに近い種の馬だろう。それに、その馬を駆る武者ぶりも、調所を失望させるに十分だった。雑兵が使うような貧弱な胴。肩垂はない。兜をかぶってはいるが、前立に装飾も何もない粗略なものだった。手甲や脚甲ははめているものの、その姿は騎馬武者にあるまじき軽装ぶりであった。

やぶれかぶれで雑兵を出してきたか、それとも武功に逸った軽卒が出てきたか。

しかし、その相手が近付いて来るうちに、調所はその考えを改めた。

近づいてくるうちに、相手の上背が分かってくる。調所とて恵まれた体格であるが、今調所の元に駆けてきている雑兵は調所と同等・

あるいはそれ以上の上背である。

それ以上に調所の目を引いたのは、その兵の得物だ。

騎馬武者の定番、大身槍。一尺数寸もの笹穂の白刃が光る。それだけならば変哲もない大身槍だが、何より目を引いたのはその全体の長さだった。通常、騎馬武者が扱う槍は自分の馬を傷つけないように寸を詰めたものを用いる。しかし、その兵が携えている槍は穂先から石突まで二丈（六メートル）はある。そんな大槍、徒兵が槍衾などの集団戦で使うもののほかに例がない。

しかし。

その兵は、二丈もある大槍を右手だけで振り回しながらこちらに駆けてくる。あの大槍を見事に使いこなしているのだ。

面白い。

馬の手綱を引き、相手の来迎を待つ。しばらくして、松平の陣から出てきた兵が、十丈ほどの距離を置いて止まった。

若い。

ここに至ってようやく相手の顔が見える。兜の下に見えるのは、若者特有の青さとあどけなさが色濃く残る若武者である。元服して少しも経たぬ若輩なのだろう。

調所は槍を構えたまま動かない。相手の出方を見ることにした。

思惑通り、先に動いたのは相対する若武者だった。

黒い馬をいからせながら、槍を大きく振りかぶりこちらに向かい振り払う。まったく気負いもなく迷いもない横薙ぎ一閃。しかし、見切れぬでもない。紙一重で笹穂の穂先をかわし、槍を繰り出す。が、相手の若武者は上体をそらし調所の突きをかわした。

また、二人の間に距離が生まれる。

ほう。

調所は嘆息した。そして、嘆息そのままに口を開いた。

「名を名乗られよ」

しかし、相対する若武者は首を横に振った。

「名乗るほどの名はまだありません」

若い声だった。ただ若いのではない。まるで逡巡がない。自分がこの場に身を置いておくことに何の疑問をも挟んでいない。ゆえに思い切りのいい槍の振りに直結している。それが若さによるものなのか、それともこの武者特有の心象なのかは調所には分かりかねた。分からねぬのなら。

武で訊ねるのみ。

今度は調所が動いた。

間合いでは負けているが馬の機動力には雲泥の差がある。あちらの馬は駄馬だ。どんなに相手の槍の振りが鋭かろうが、自分には届かないという自信が調所にある。またたく間に間合いを侵略し、今度は振り払いに入った。円を描き思い切り加速の入った薙ぎを若武者に浴びせる。

が、若武者はそれを馬上で難なくかわす。ならば。

返す刀でもう一丁振り払い。が、当たらない。袈裟気味に振り下ろす。が、当たらない。突きや石突での叩きなど、出しうる限りの手を出し続けるものの、当たらない。相手は確実に間合いのうちに居るはずなのだ。だが、まるでこちらの動きが全て見えているかのように、若武者は調所の槍を避け続けた。

「ちっ！」

また距離を置く調所。遠巻きに相手を眺めながら、心の中で呟く。大した奴だ、と。

そして、調所はここまでの立ち合いで気づいた。この若武者の戦いは、他のどの武者とも違う、と。

調所も含め、武者の多くは重い鎧に身を固める。重い鎧をまとえるのは身体が大きく強力な者の特権である。重い鎧はただ伊達に重いわけではない。当然重ければ重いほど敵の攻撃から身を守ってくれるのである。それがゆえ、武者振りを誇る者ほど重装備になっていくものだ。

しかし、この若武者は違う。

重い鎧をまえば敵の攻撃から身を守ることが出来る。だが、その重さゆえに武技にも多少の支障が出る。それに、重装備になればなるほど可動域が減り、どんなに重い鎧をまっても防ぎ切れない一撃をかわせなくなる。恐らく、軽装で挑んできたこの若武者は、重装備によつて身体の働きが阻害されるのが嫌で、軽装の鎧を選び取っているのだろう。確かに、あれほどの見切りの目があれば軽装の方が理にかなっている。

しかし。調所は首をかしげる。かような若武者、蔵人佐殿の処にいただるうかと。

まあ、いい。

だが、二丈あまりの大槍を構え悠然と立つ若武者を見据えたその瞬間、調所の中に遣る方のない疑問が浮かんだ。普段ならばそんな疑問、唾棄するところだ。戦場で武者が口を開く必要はない。しかし、いつもの調所にない何か調所自身を蝕んだ。

槍を一薙ぎした調所は若武者を呼ばわった。

「名乗るほどの名がないという若武者。お前の名は訊かん。だが、

一つ答えよ。何故お前は松平蔵人佐殿の元で武を振るう。なぜ

一向一揆に加わらぬ？」

若武者は動かなかった。

しかし、しばらくして、ゆっくりと口を開いた。

「名に聞こえし蜻蛉殿、あなたは『欣求浄土』という言葉をご存じか」

知らぬわけはない。一向一揆はそれを旗印にして戦っている。額くと、若武者は続けた。

「わしの殿、松平蔵人佐様は『欣求浄土』を目標にしておられる」

「それは一向一揆とて同じこと」

「いや、違う」

若侍は言い切った。その澁刺とした声で。

「一向衆の『浄土』は来世にあるものだ。しかし、殿の『欣求浄土』は違う。殿はこの世に『浄土』を造ろうとなさっておいでなのだ。

面白いと思われぬか、この世の浄土。わしはそれを見たい。殿と一
緒に」

この戦国の世を、浄土に？

なるほど、家康殿は未だ若輩であらせられたが、かような青いこ
とを言っているのか。

しかし。

調所はようやく分かった。自分の中にある逡巡の正体に。

そして調所は気づいた。自分は今、居場所を間違えているのだと
いうことだ。

だが、そう分かってしまったとしても、武者にはここで退くとい
う選択肢は残らない。槍の鞘を払ったからには、その穂に血を吸わ
せなくてはならぬのが武者。そして、一度加勢したからには最後まで
節を曲げずに戦うのが武者たるものの魂である。

調所は馬の腹を叩いた。

「問答は終わりよ。名も知らぬ若武者、我が槍の錆となれ！」
若武者に殺到する調所が繰り出したのは、駿馬の勢いに乗って放
つ右片手の突きである。馬の速度の分、その威力は倍加される。

しかし、若武者の方が早かった。

やはり馬の腹を蹴るや二丈の大槍を両手で構え、袈裟気味に振り
下ろした。

一瞬、二者の槍が交錯する。

が。

調所の槍は空を切り、若武者の槍の穂先が調所の兜に激突した。

「ぐっ」

短い悲鳴を上げ、調所は鞍からずり落ちた。どしゃ、と音を立て
て頭から地面に落ちた。

何が起こったか分からず、調所は泥にまみれながら仰向けになっ
て立ち上がるうとした。しかし、目が回ってそれが叶わない。頭を
打たれたせいで目の前に星が飛んでいる。

死ぬか。

仰向けに倒れる調所のことを、いつの間にか馬上から若武者が見下ろしていた。

調所は、若武者の視線から目をそらさなかった。五体を投げ出して、口を開いた。

「お主ほどの武者ならば、まさか作法を知らぬことはあるまい。さあ、この首取って手柄とせよ。名に聞こえた蜻蛉武者を討ち取ったとあれば、お主も武功第一だろう」

しかし、若武者は首を横に振った。

「否。殿より、あなたのお命は助けるように言われている。この戦が終わったら、また家臣団に戻るがよいとの殿のお言葉でござる」
「馬鹿な」

調所は笑う。これほど明確に反旗を翻した一地侍を、家康殿は生かした上にまた抱えようと言うのか？

「殿のおっしゃる浄土を作るためには力がある。しばしわしゃあなたのような武者の力が要る」

「ふん」

駄々をこねる餓鬼のように、調所は鼻を鳴らした。

若侍は笑う。

「今すぐ決めるとは言いはしませぬ。ゆっくりと決めてくだされ」
馬を走らせようとすする若侍。だが、その若侍を調所は引き留めた。

「おい」

「なんです」

「お主ほどの武者がなぜ斯様な駄馬を使うのだ。若武者ゆえにいい馬に乗れぬのか」

若武者は苦笑いを浮かべた。どうやら凶星らしい。

「ならば」

調所は自分の馬を指した。

「この馬を連れていくがいい。蜻蛉武者の武功を支えた名馬だ。お前には不足かも知れぬがな」

「よろしいのか」

その言葉は、馬を貰っていいのか、という問いとは少し違う響き方をしていた。若いくせに、馬をくれるという行為の裏に秘めた調所の心を読んでいる。調所はなんだかバツが悪かった。

「いい。俺はここで終わりだ」

「わかった」

黒い馬から降りた若武者は、調所の馬によじ登る。いつもは調所以外の者を乗せたがらない馬が、まったく嫌がるそぶりを見せなかった。

そうやって駿馬に乗ってみれば、やはり見事な武者振りであった。

「行け」

「ああ」

若武者は駿馬の腹を叩き、一向一揆勢へと単騎駆けしていった。

ちくしょう。

頭がまだ痛い。

それに、空がやけに青い。

「俺は」

空を見上げながら、調所は呟いた。

「間違えていたのだな」

あの若武者には全く逡巡がなかった。

調所はあの若武者とは違う。調所には守る者も守る家もある。色々なものが感じがらめになって、気づけばひどく不自由なところに身を置いていた。兄への情に縛られ、信じてもない一向一揆に参加した。

もしも、あの若武者のように生きることが出来たなら
。 。
いや。

調所は頭を振った。

きっと、あの若武者と同じところに身を置いても、きっとあの若武者のようにはいかなかったのだらう。なにせ、自分とは比べるべくもないほど、あの武者ははるか遠くを走っている。

出来るなら。調所は思った。あの若造にはいつまでもはるか遠く

を走ってもらいたいものだ、と。

ふと脇を見た。

頭をしこたま打たれた瞬間に兜の緒が取れていたらしい。調所の脇に兜が転がっていた。

しかし、思わず目を見張った。

鍛鉄で造られているはずの兜の前半分は、大きな切り込みが入っていた。そして、調所自慢、そして代名詞だった蜻蛉の前立が真っ二つになっていた。鋼鉄で造られたはずの、蜻蛉の前立が。

「蜻蛉を切ったのか、奴の槍は」

調所の呟きは戦の熱気に溶かされ、やがて消えていった。

ふと見れば、松平方の武者たちがこちらに殺到してくる。対する一向一揆方は、蜻蛉武者の墜落に士気が落ち、さっきまでの勢いが吹き飛んでいる。

ようやく足をふらつかせながらも立ち上がった瞬間、若武者が置いて行った駄馬が調所の目にとまった。

「お前、走れるか」

駄馬はふん、と鼻を鳴らした。乗せて行ってやらんでもない、と言わんばかりに。

「かたじけない」

その馬にまたがり、蜻蛉の兜を棄てた蜻蛉武者は遁げた。たった一騎、松平にも、一向一揆にも背を向けた。

三河国を二つに割った三河一向一揆。半年間続いた内乱は、松平家康の手によって平定された。一向宗側に加担した部将たちも、多くはその罪を許された。時は折しも織田信長と同盟を組み、織田信長に従う形で東海の覇権を目指した頃である。旧罪を許し、一人でも多く強力な武者を抱えたかっただというのが家康の本音であろう。

もちろん、あの戦から辛くも脱出した調所にも、松平家に帰参すべしとの要請が降りてきた。しかし、調所はその時には既に剃髪していた。

この三河一向一揆により、調所は守るべき家を失った。戦が得手ではない兄も三河一向一揆の露に消えた。郎党たちの多くも三河一向一揆により死んだ。領民たちは、家康の締め付けのままに一向宗を捨て、武器をも捨てた。調所はといえば、「戦国に消えた桜井家の菩提を弔うため」と称して、一坊主として生きる道を選んだ。

晩年の調所にはさしたる逸話もない。日に日に戦国の空気からかけ離れていく三河の片隅で、寺の掃除や読経などして日々を過ごしたのだろう。平穏な暮らしを営む調所とはあべこべに、松平家康は三河の土豪から脱して徳川を名乗り、天下の戦に奔走することになる。が、家康の天下取りなど、もはや調所には関係のないことであった。

調所が死んだのは、豊臣秀吉により北条攻めが行なわれる直前の事であった。死ぬまで槍を握ることはなかったという。

さて、調所の前立を切った槍である。

この槍はその後も持ち主と共に戦を駆け巡る運命をたどる。後世、家康の危機と謳われる三方ヶ原の戦いや伊賀越えにおいて、その持ち主共々家康を守る力となった。それだけではない。天下分け目の関ヶ原の戦いまで戦に出陣し、家康の天下取りの戦を見てきたのである。この槍の持ち主である本多忠勝は、その活躍を讃えられ徳川四天王に列せられている。

そして、本多忠勝と共に戦を駆けつけた槍には、逸話が伝わる。

さる戦に出陣の際、戦場を舞う一匹の蜻蛉を切った。

この逸話により、その槍には号がついている。

『蜻蛉切』と。

(後書き)

リハビリ作。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7838y/>

切られ蜻蛉の事

2011年11月23日12時55分発行